第２章　向井流東京連絡会の歩み

第１節　向井流東京の歩み　55－61頁
第２節　「向井流東京連絡会」設立後の活動　62－67頁

平成29年（2017）３月現在、向井流東京連絡会を構成する５団体「向井流水法研究会」「向井流水法道場」「雪ヶ谷スポーツクラブ」「向井流錦会」「水法研修会世田谷」は、師上野徳太郎の指導を受けた個人や団体から、収束や再編をくりかえしながら、東京で向井流を伝承する泳法団体として、その泳法技術の継承と発展をしてきました。

師上野徳太郎の向井流泳法は前章でも述べたとおり、明治からの東京隅田川の水泳場において、笹沼勝用、鈴木正家を経て継承された泳法です。

師上野徳太郎は公私にわたり様々な場所でその泳法を伝授し、現在の向井流東京連絡会の各団体に引き継がれています。

その各団体の詳しい歩みや現況などについては、別掲の「各会紹介」に述べますが、本章では、師上野徳太郎の指導はいつから、どこで、どのような人たちに受け継がれて、現在の向井流東京連絡会の設立に至ったのか、そして設立後現在に至るまでどのような活動があったのかについて再確認の上、「向井流東京連絡会の歩み」として述べます。

第１節　向井流東京の歩み

１.「向井流東京」「向井東京」の呼称

前述のとおり、向井流東京連絡会は現在、上野徳太郎門下の団体によって構成されていますが、向井流東京連絡会設立以前にも、師上野徳太郎の向井流の泳ぎ（笹沼勝用、鈴木正家の泳法を継承する）以外の系譜を持ち、向井流の泳ぎを研鑽する同好会や団体もありました。

「向井流東京」という呼称が使われ始めた時期、経緯など明確にはわかっていませんが、（財）日本水泳連盟主催の「日本泳法大会」プログラムによると、一部の参加者の登録流派、団体名として、昭和38年（1963）から使われています。昭和38年（1963）日本泳法大会に参加した衟（つじ）いち子、小杉しげ子、松本貞（てい）子らの流派、団体名は「向井東京」となっています。当時各々は「向井流東京游泳所」という同好会で、師上野徳

太郎の指導を受けていたと思われますが、その名称での登録とはなっていません。

同じく日本泳法大会のプログラムによると、昭和34年（1959）、小樽岩本会（現向井流水法会）の村田一夫が「向井小樽」の流派、団体名で日本泳法大会に登録、参加されています。

このことから「向井東京」という呼称が使われたのは、単に上野徳太郎門下と他との区別からではないか、と推測されます。

当時の日本泳法大会では他の流派に比べ、向井流の団体の参加数は、さほど多くありませんでした。

このような経緯から日本泳法の関係者の間では当時より、上野徳太郎門下の個人、団体とその泳ぎは、「向井流東京」・「向井東京」の泳ぎとして認知されてきたと考えています。

２．師上野徳太郎による向井流泳法はどのように伝播していったのか

師上野徳太郎が公式に向井流を指導したのは、昭和34年（1959）、東京体育館主催事業として一般水泳とともに向井流泳法を指導したことが始まりのようです。早稲田大学に在職中でもあり、この時期の向井流の指導については、「向井流東京游泳所」の名の同好会組織で松本貞子、村田信夫、街いち子が、当時メンバーとして教えを受けていたことのみわかっています。その具体的な内容、主な練習場所等ははっきりとした記録はなく、明らかではありません。

早稲田大学を昭和47年（1972）70歳で退職して後は、都内各所で様々な団体、教室において日本泳法、向井流泳法を中心に精力的な指導をしてきました。

師上野徳太郎が、向井流泳法を中心とした指導を積極的に開始した昭和47年（1972）から、実質的に指導を引退した昭和55年（1980）までの間、どの場所で、どういう人たちを指導し、その指導はどう受け継がれていったかを、以下にまとめてみました。なお、年代順に団体、個人への指導の経過について、図２－１にその概略を表しました。

１）「東京アスレチッククラブ」から「潮（うしお）」まで（昭和47年（1972）～）

昭和47年（1972）中野の東京アスレチッククラブ（TAC）で、女性コースの指導員であった載間（としま）文と畑山泰子が上野徳太郎から日本泳法の指導を受けました。上野徳太郎は東京アスレチッククラブの顧問として、昭和47年（1972）から平成３年（1991）までの期間、長きにわたり在籍しました。

その後、載間文は昭和49年（1974）高田馬場ビッグボックスで「潮会」を立ち上げ、

畑山泰子がその指導にあたりました。

昭和54年（1979)、載間文は「雪ヶ谷スポーツクラブ」を設立し、その際「潮会」を吸収しました。そして、その日本泳法部門顧問に上野徳太郎が就任しています。

また、昭和59年（1984）には中野サンプラザの水泳同好会「潮」で日本泳法向井流の教室を設け、畑山泰子が指導を担当しました。

２）「若鮎会」（昭和47年（1972）～）

昭和47年（1972）上野徳太郎は、品川区荏原文化センター職員であった向井流水法道場会員の街いち子の要請で、婦人水泳クラブ「若鮎会」の水泳入門クラス、初心者クラスの競泳を指導し始めました。昭和48年（1973）には、その常任講師となります。

昭和49年（1974）11月には日本泳法部門のクラスができ、昭和50年（1975）10月にはそのクラスが「錦会」となりました。上野徳太郎は、昭和53年（1978）まで「若鮎会」および「錦会」の講師として日本泳法を指導しました。

上野徳太郎が退いたあとの「錦会」の指導は、「向井流水法道場本部会」の松本貞子が引き継ぎ、その後昭和58年（1983）立川静子が指導を引き継ぎました。

３）「向井流水法道場」（昭和48年（1973）～）

上野徳太郎は、高田馬場ビッグボックスで「向井流水法道場」として、昭和48年（1973）から向井流泳法の本格的な稽古を始め、多くの門下生が集いました。「向井流水法道場」という名称は上野徳太郎が、昭和38年（1963）松本貞子が水練証を受けた際に、対外的に使うようにとのことで授けた教室名だということです。その松本貞子、江口善文を始め、前述荏原文化センター職員の街いち子、「向井流水法研修会」を指導する立川静子と平井昌子、「潮会」で指導していた畑山泰子もこの「向井流水法道場」で、上野徳太郎の指導を受けました。

その後、会員と練習生が増え続けた結果、日本泳法の有資格者も増加しました。昭和51年（1976）には有資格者（「水練証」）のみで「向井流水法道場本部会」が発足し、上野徳太郎はその会長を務めました。

その後昭和55年（1980）上野徳太郎は勇退し、松本貞子が指導を引き継ぎました。昭和63年（1988）からは有元貞子が「向井流水法道場本部会」を引き継ぎ、「向井流水法道場本部会女子部」の会長となります。

また、ここ「向井流水法道場本部会」からは、後の団体指導者の多くが生まれました。立川静子は、日本泳法を指導していた世田谷太子堂中学校プール（「若鮎」）と荏原文化センタープール（「錦会」）のクラスを、昭和58年（1983）「向井流水法研修会」

として、「向井流水法道場本部会」から独立しました。また中原隆子は、昭和61年(1986)、競泳のサークル「泳友会」で日本泳法を指導し始め、８月に向井流水法道場本部会を離脱と同時に、「泳友会」は向井流の組織として独り立ちしました。

４）「土曜会」（昭和48年（1973）～）・「中野区立第九中学」（昭和49年（1974）～）・「千尋会」（昭和50年（1975）～）

上野徳太郎は昭和48年（1973）中野サンプラザ内プールで「一般水泳指導員資格」を有する人を対象とした「土曜会」にて日本泳法を指導しました。

また、昭和49年（1974）10月から日曜日の午前中を使って、中野区立第九中学校温水プールで向井流の有資格者の指導と研修を行いました。当時の参加者について有元貞子の談に依れば、松本貞子、街いち子、織原みよ子、江口善文、三田三郎、有元貞子だったとのことです。

また、昭和50年（1975）には、中野サンプラザと東京体育館を併用する「千尋会」（代表：戸津寛子）でも向井流を指導しました。

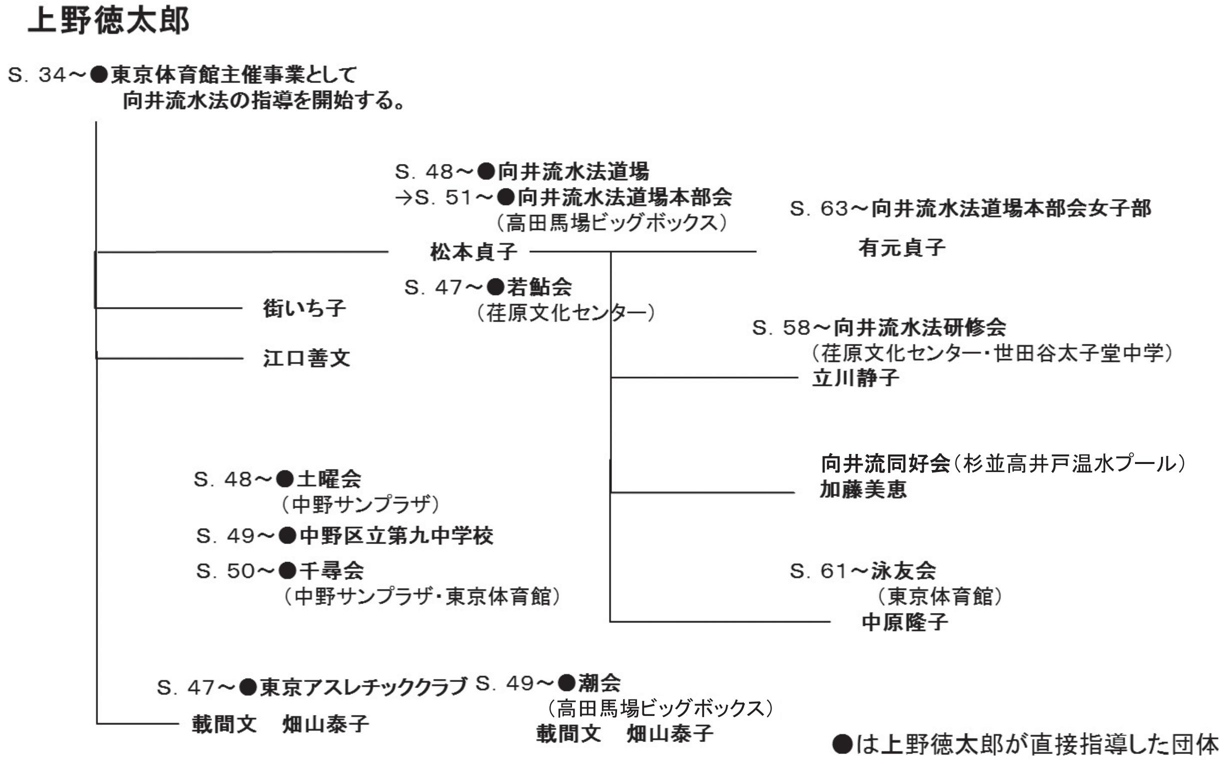

図２－１　上野徳太郎指導の流れ

３．上野徳太郎門下向井流東京の再編

上野徳太郎門下向井流東京各団体はその後、指導者の交代や団体の分離、合併などの再編が行われました。

１）「雪ヶ谷スポーツクラブ」畑山泰子による「潮」での指導

昭和59年（1984)、「雪ヶ谷スポーツクラブ」の畑山泰子は同所のみでなく、中野サンプラザの水泳同好会「潮」でも日本泳法向井流の教室を設けて、その指導に当たりました。

２）向井流水法研修会世田谷と向井流水法研修会品川の成立

平成元年（1989)、「向井流水法研修会」は、立川静子の逝去に伴って、「向井流水法研修会」のうち世田谷（太子堂中学校プール）を「向井流水法研修会世田谷」として瀬尾圭子が引き継ぎ、品川（荏原文化センタープール）を「向井流水法研修会品川」として、平井昌子が引き継ぎました。

３）向井流水法道場の再開

平成７年（1995)、江口善文が師上野徳太郎本来の泳ぎの継承を目的に「向井流水法道場」の稽古を再開しました。平成11年（1999)、江口善文の逝去により山野井佳寿子がその指導を引き継ぎました。

４）向井流水法研究会の成立

平成８年（1996)、「向井流水法道場本部会女子部」の有元貞子と「泳友会」中原隆子が運営上の話し合いの結果合併し、「向井流水法研究会」を創立しました。

４.「向井流東京連絡会」設立への過程

昭和55年（1980）以降、上野徳太郎が水泳の指導から勇退した後、昭和57年（1982）まで向井流の日本泳法大会競技種目は、上野徳太郎の指導と教示によって提示されたものでした。

それに対し当時の日本水泳連盟日本泳法委員長堀内幸雄から、「向井流水法道場本部会」の松本貞子に対して、向井流本来の泳ぎに絞ることが望まれる旨の教示がありました。

それにあたって、松本貞子は小樽「向井流水法会」の村田一夫にパイプ役を依頼し、向井流水法会会長の竹原榮と泳法種目削減の合意を得ることができました。以下13種

がそれまでの泳法種目でした。

平泳　平掻　平伸　抜手　小抜手（バタ足・跛抜手）　肩指

一重伸　抜手伸（上野創作）　片抜手　平水　諸抜手（鰡）　立泳

年度により泳がれた種目は異なりますが、種目削減によって現在泳がれている種目は以下の通り６種目となっています。

平泳　平掻　抜手　肩指　平水　諸抜手

但しこの松本・竹原合意の種目削減の件は上野徳太郎が入院中で不在時のでき事でした。そのため当時、「向井流水法道場」の副会長の指名を受けていた江口善文は、日本泳法委員会に上野時代の泳ぎに戻すよう抗議の書簡を送っています。

そして平成２年（1990）８月19日には、〈日本泳法委員長堀内先生を囲む　在京向井流研鑽会〉を東京体育館の研修室で開催しました。以降、在京向井流団体の合同練習会の機会を持つことを目的に、研鑽会が開かれ平成４年（1992）11月15日、平成５年（1993）７月11日・17日・18日・12月13日と会合を重ねました。

写真２－１　堀内幸雄氏との研修会

平成７年（1995）10月10日には、当時の日本水泳連盟日本泳法委員長山口和夫から、向井流東京の諸団体に連絡会結成への強い勧めの提言書が届けられました。

それに呼応し向井流東京団体間で意見交換、準備を進め、12月３日の連絡会発足の賛否を決するための会合では大半の賛意を得られました。この時の参加団体、個人としては「向井流水法道場」「向井流水法道場本部会」「雪ヶ谷スポーツクラブ」「泳友会」「向井流水法研修会世田谷」「向井流水法研修会品川」「向井流同好会」の７団体と１個人「吉葉多智子」の登録がありました。

平成８年（1996）１月には、「東京の向井流を、泳ぎ研鑽する団体、および個人間相互の連携・協調・親睦を図り、向井流東京の発展に資する」という目的のもと、その規約は案としたまま、仮の承認を得、３月３日に「向井流東京連絡会」の発会式を中

野区の寿司店で開催しました。

写真２－２　向井流東京連絡会発会式

平成９年（1997）９月14日に正式に規約案に改訂を加えて会則を制定し、相談役として山口和夫に就任いただきました。

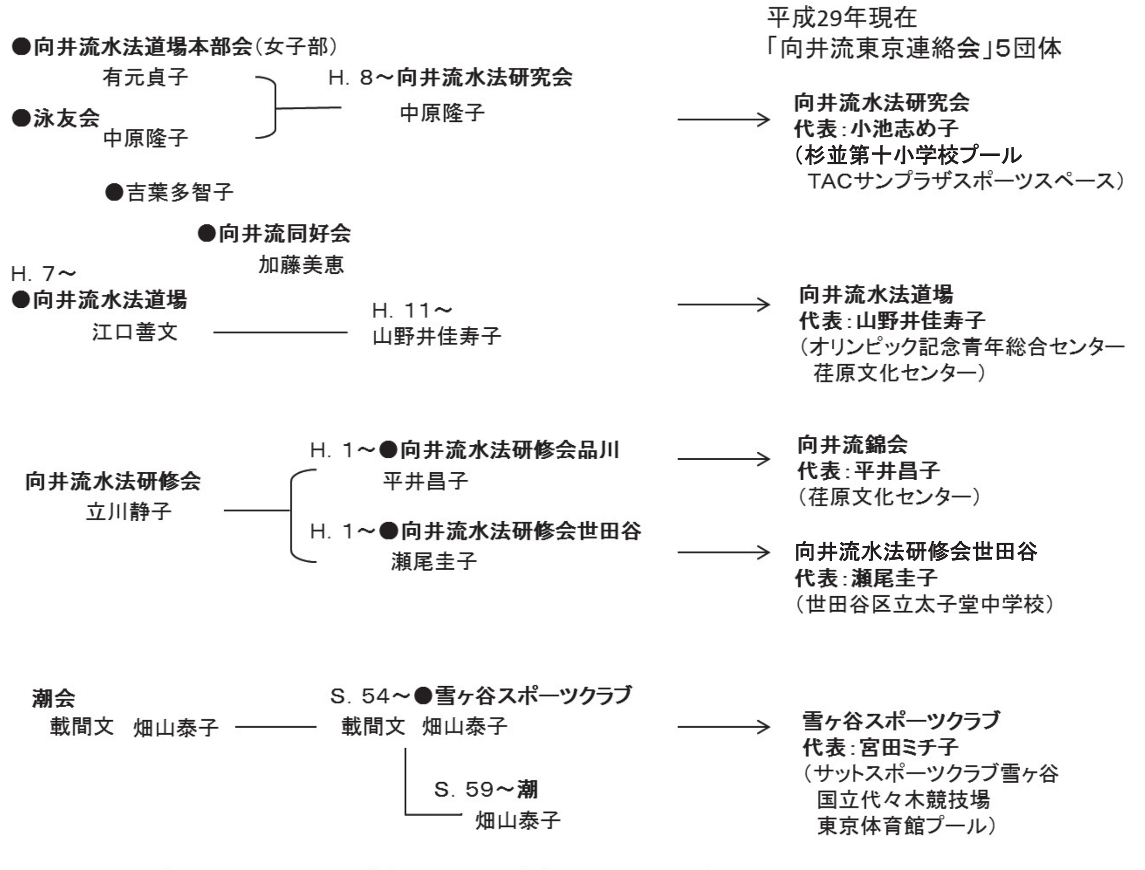

図２－２　向井流東京各団体の再編と向井流東京連絡会設立まで

第２節　「向井流東京連絡会」設立後の活動

１．泳ぎ合わせ会の実施

平成８年（1996）11月７日、東京体育館プールにて、向井流東京連絡会各団体参加による泳ぎ合わせを、松本貞子の指導のもと実施しました。

平成10年（1998）から平成16年（2004）２月までは、第53回日本泳法研究会での発表に向けての準備として講習会や泳ぎ合わせを実施し、以後も、向井流東京連絡会としての泳ぎ合わせ会が、年に数回行われるようになりました。（詳細は後述項３で述べます）

日本泳法研究会発表の準備のための泳ぎ合わせの第１回合同研修会は、平成12年（2000）10月29日から、平成16年（2004）２月まで７回にわたり中原隆子の指導で行われました。

そして日本泳法研究会での発表以降の泳ぎ合わせは、平成18年（2006）10月の東京都水泳協会の審判研修会での発表をきっかけに始められ、平成21年（2009）までの合計９回、同じく中原隆子の指導で、東京体育館プールと世田谷太子堂中学校プールを中心に行われました。

以降、平成22年（2010）からは山野井佳寿子の指導のもとで、代々木国立競技場プールを中心として時には世田谷太子堂中学校プールで行われました。

その目的は、日本泳法研究会や東京都水泳協会審判研修会での発表のための準備、また個人においては、日本泳法大会への参加、資格審査への準備や泳法能力向上のための研鑽など、様々な意図を持って実施されました。そして何よりも、上野徳太郎門下の向井流東京の泳ぎに対する泳法の共通理解において、また会員相互の交流という意味においても、非常に意義の大きい取り組みとなりました。

この泳ぎ合わせは現在も継続的に実施されています。向井流東京連絡会としては合計35回の実施回数を数えました。（平成28年（2016）８月現在）

２．「日本泳法12流派総覧」原稿作成への取り組み

平成10年（1998）８月、日本水泳連盟企画・出版の『日本泳法12流派総覧』への原稿依頼が松本貞子にあり、平成13年（2001）３月発行に向け、原稿作成に取り組みました。連絡係は有元貞子、瀬尾圭子と引き継ぎ、原稿作成は松本貞子が主導し、江口善文、続いて中原隆子が取り纏めを行いましたが、最終的には有元貞子が現向井流東京連絡会顧問の中森一郎（当時大谷大学短期大学部助教授）に協力を依頼し、その体制のまま数回の手直しの後、原稿を完成させることができました。

３.〈第53回日本泳法研究会〉への取り組みと向井流連絡会設立

１）発表のための準備作業

平成16年（2004）３月の第53回日本泳法研究会「課題　向井流」に向けて、「向井流研究会準備グループ」（仮称）結成及び規約（案）制定をする旨の話合いを、平成９年（1997）11月９日に持ちました。

テーマが「端技（はわざ）」ということで有資格者を対象に、松本貞子の指導で「水車」や「邯鄲夢の枕」など端技の練習を、平成10年（1998）６月３日杉並第十小学校プールで実施しました。この松本貞子の端技の講習は、同年の９月30日まで杉並第十小学校、荏原文化センタープール、新宿コズミックスポーツセンタープールを会場に、計15回行いました。

そして向井流東京連絡会の泳ぎ合わせとしては、第１回合同研修会を中原隆子の指導のもと、世田谷太子堂中学校プールにて平成12年（2000）10月29日に行いました。この第１回目の合同研修会には、向井流東京連絡会以外から特別に、向井流最高顧問向井二郎、会津向井流水法会会長玉川芳雄、同会員古川英司も参加しました。この合同研修会はその後、世田谷太子堂中学校プール、東京体育館プール、国立オリンピック記念青少年センタープール、国立競技場霞ヶ丘プールを会場に平成13年（2001）７月、平成14年（2002）４月・５月、平成15年（2003）10月・11月、平成16年（2004）２月と回を重ねました。

２）向井流連絡会の結成

平成14年（2002）６月９日、〈第53回日本泳法研究会〉に向けて、向井流全体が一致団結して取り組むことを念頭に「向井流連絡会」結成のための準備会議が中野サンプラザにて開催されました。この時の参加者は、向井流水法会会長川端信義、会津向井流水法会会長玉川芳雄・鈴木隆雄、川口水術練習所向井流保存会会長並木八郎、向井山敷会会長櫻井昇、向井流東京連絡会代表中原隆子、向井流水法研究会名誉会長有元貞子、向井流最高顧問向井二郎、日本水泳連盟日本泳法委員長山口和夫でした。

同時に「向井流連絡会」が結成され、事務局を向井流東京連絡会に置き、中原隆子が担当することなどが決議されました。

事務局はその後、平成16年（2004）３月より向井流水法研修会世田谷瀬尾圭子が、平成22年（2010）３月からは向井流水法会秋田優が引き継ぎ、平成24年（2012）３月からは向井山敷会櫻井昇が、平成25年（2013）３月より現在まで向井流水法道場山野井佳寿子が引き継ぎ、事務連絡を担っています。また、平成26年（2014）には会則の一部変更を行いました。

３）第53回日本泳法研究会（於：小樽市）

平成16年（2004）３月27・28日、第53回日本泳法研究会「課題　向井流」が小樽市で開催されました。27日の研究発表では有元貞子が向井家所蔵の『御成御用諸書留』、中原隆子が同所蔵の『水泳書』について口述発表し、翌日28日の実技発表は、連絡会すべての団体から泳者が出て演じました。

４.「各流・各派」泳法競技審判要領の改訂作業

日本水泳連盟より『「各流・各派」泳法競技審判要領』第３版の改訂にあたって、向井流東京に対する改訂作業の要請が平成15年（2003）８月にあり、取り組みました。東京と小樽の泳ぎの名称と形態を取り上げながら、向井流東京の泳ぎに対する説明表現の統一を図ることを目的に、平成15年（2003）10月から翌年にかけ作業し、平成16年（2004）８月発行の第３版に掲載されました。

また、平成26年（2014）には日本水泳連盟から、さらなる説明表現の具体化と、一層の理解しやすさを求められ改訂作業に取り組み、一部表現の修正を行いました。

５. 東京都水泳協会審判研修会「向井流」のための泳法統一作業

平成18年（2006）10月１日東京都水泳協会審判研修会（於：国立霞ヶ丘プール）で向井流が取り上げられることになり、同年６月太子堂中学校プールで泳ぎ合わせを行い、連絡会内での向井流各泳法に対する統一的な話し合いを行いました。また同年９月24日にリハサールを行いました。研修会当日は有元貞子と山野井佳寿子が泳法解説、中原隆子が実技指導をし、連絡会の各団体から２名ずつ泳者を出しました。この泳法統一のための泳ぎ合わせの取り組みは前述のとおりで、今日も引き続き継続して行われています。

６.「諸抜手」（游進型・跳飛型）相違の泳法競技上の調整

平成19年（2007）３月の第56回日本泳法研究会の折、「諸抜手」について向井流水法会の游進型を平体種目として新採用し、従来の跳飛型は立体種目として存続し、日本泳法競技会の種目としてどちらも泳ぐことが可能であると調整をしました。

これは昭和57年（1982）日本水泳連盟日本泳法委員長堀内幸雄の教示で、泳法大会時の向井流の泳法種目を６種目に変更した際から、向井流東京連絡会、向井流水法会との間の懸案事項でした。このことにより向井流東京と向井流水法会の間で、諸抜手に関し、同名異技に対する双方の共通理解が深まったと捉えています。

７．向井流東京連絡会の組織を再構築

平成19年（2007）７月22日、向井流東京連絡会各団体間との連携、及び向井流東京連絡会の代表兼事務局を設置することについて会合を開きました。同日、午後２時新宿のレストランに各団体代表者が集まり,主に以下のことが話し合われました。

一、向井流東京連絡会の組織を再構築（代表兼事務局の設置）；各団体間及び日本泳法委員会との連絡を密にする事を目的として、従来当番制であった連絡会の事務局を代表制とする。この代表兼事務局を、向井流水法研究会の中原隆子が務めることとする。

一、向井流東京の泳ぎ；東京連絡会のなかでのおよぎの統一を「泳ぎ合わせ会」として、実施する。

平成24年（2012）２月５日、東京体育館にて、今後に向けて向井流東京連絡会の発展を次の目標に定めて、組織の若返り及び再編成に取り組むことについて話し合いました。主な合意事項は以下の通りでした。

一、向井流東京連絡会の代表に山野井佳寿子を推薦；代表を補佐する条件で、顧問に中森一郎・相談役に中原隆子があたることとする。

一、向井流東京連絡会を運営するための委員会設定；役割分担として連絡係・会計などを設ける。

一、定期的な泳ぎ合わせ会の開催；上野先生よりの伝承を正しく伝えていくための泳ぎ合わせを目的として、年に数回行うことや、指導内容等を検討課題とする。

現在も上記の合意事項を遵守し、向井流東京連絡会は、山野井佳寿子を代表として活動を継続しています。

８．上野徳太郎没後記念事業推進

有元貞子は、平成３年（1991）３月師上野徳太郎が逝去して以来、その師を偲び、記念となる行事を何ら行ってきていないことに想いを抱き、平成21年（2009）２月頃から当時大谷大学教授の中森一郎に支援を仰ぎ、記念事業実施の模索が始まりました。

先ず同年６月に、向井流水法研究会の中原隆子の同意を得、同８月には向井流東京連絡会各団体代表の賛同、同９月には師上野徳太郎に関する情報収集の方向性と事業企画に対して、師上野徳太郎御長女猪谷隆代氏の賛意を得ることができました。

この賛意を経て、記念事業推進のための第１回準備会合を平成21年（2009）11月28日に行い、向井流東京連絡会の各団体代表者および担当者で構成する委員会によって、冊子作成と記念事業実施を平成23年（2011）３月６日に行うことを決めました。

事業の名称は「師上野徳太郎没後20年記念事業実施委員会」とし、メンバーは有元貞子、中原隆子、中森一郎、山野井佳寿子、平井昌子、瀬尾圭子、宮田ミチ子、長澤聡子、堀井淳子、山根朋子、大栗和道の11名で構成しました。

平成22年（2010）２月の第３回目の会合からは、原則毎月１回の会合を開くこととし、各担当の進捗状況、情報提供、必要事項の決定を行う会合は合計20回にわたり行われ、作業に取り組み、平成23年（2011）２月には冊子が完成しました。

そして同年３月６日、永稱寺において慰霊法要と、世田谷区キャロットタワーにて〈冊子発刊並びに師上野徳太郎を偲ぶパーティー〉を開催しました。

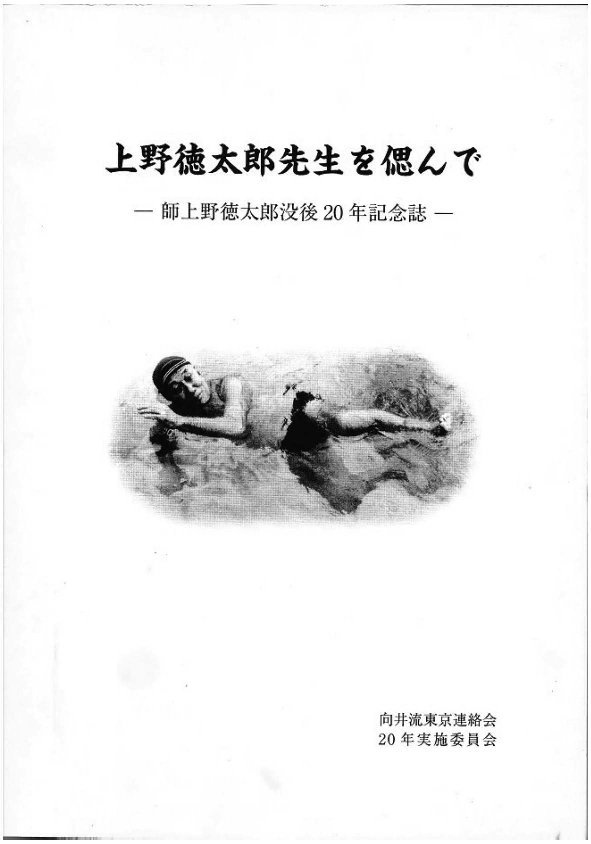

写真２－３　上野徳太郎没後20年記念誌表紙

写真２－４　永稱寺上野徳太郎墓前にて

写真２－５　世田谷キャロットタワーにて

９．第65回日本泳法研究会に於て発表

平成29年（2017）３月開催の日本泳法研究会「課題　向井流」に向けて、向井流東京連絡会としての準備作業を行うため、平成26年（2014）５月より準備委員会を立ち上げ会合と泳ぎ合わせを積み重ねてきました。同年３月11日・12日の発表本番では、上野徳太郎門下（向井流東京連絡会：以下‘上野門下’と略す）と岩本忠次郎門下（向井流水法会：以下‘岩本門下’と略す）の泳法について、改めて文字と実技で披露しました。双方門下の歴史的経緯と泳法の違いを明確に示すことができました。

10．向井流東京上野門下連絡会の立ち上げ

上記の研究会発表の後、“向井流東京”に発した師上野徳太郎の伝承を持つ団体総称、“向井流東京連絡会”の呼称について検討することになりました。

検討の理由は、東京都内の向井流の継承において、山敷徳次郎に依る伝承の「向井流山敷会」の存在があり、紛らわしいとともに上野徳太郎に依る伝承を守る会であることを明確化することが望ましいと考えたからでした。

検討結果としては、総称を“向井流東京上野門下連絡会”として、新たに立ち上げることになりました。

組織としては、現在「向井流水法道場」「雪ヶ谷スポーツクラブ」「向井流錦会」「向井流水法研究会」の４団体で発足しました。

（第２章文責者：宮田ミチ子・中原隆子・小池志め子）